

女三の宮創造

—幼稚な人柄の意味するもの—

森 一郎

一 親のなげきの女君

源氏物語の作者は、何故女三の宮のような人物を、いわゆる源氏物語第一部を主導する人物として創造したのであろうか。

女三の宮は朱雀院の鐘愛する内親王であるが、未成熟な幼稚さをもつて特質づけられ、親のなげきとなる姫宮であった。

若菜冒頭は、朱雀院出家の決意にともなう女三の宮の将来への不安、院の憂慮が語られ、やがて朱雀院の、乳母を相手の、婿えらびの評議が長々とつづく。親のなげきとなる頼りなくあふなつかしい宮の人柄が浮かびあがってくる。すると、私たちは朱雀院の深い悲しみを、いたらぬ子ほど可愛いという親心の切ない心情を、感じる。

他の内親王より特別にこの宮に院の心くばりがあるのは、この宮の異常にいたらぬ生育ゆえである。思えば、院はこの宮ゆえに出家するにも出家しきれない煩惱の悲しみを味わわれたにちがいない。

この心残りを解消すべく、心の平安を得べく、院は婿えらびに心をくだき光源氏に白羽の矢を立てられた。

ところが後年、女三の宮と柏木の密通事件が起こった。密通事件のことは院に知らされぬまま、不幸な宮の出家の願いを父としてかへておやりになるということ、出家後の院はなされたのである。出家後までも、父としてこの宮に対する安らぎはついに得ることができなかつたばかりか、宮の不幸をまざまざと御覧にならねばならなかつた。隆能源氏に描かれている、出家の願いを泣いてうったえる宮を前に朱雀院が泣いていらつしやる図は、院の限りない悲しみを私たちにつたえる。女三の宮という人物が親のなげきとなる女君であることを絵画として象徴的に表わしている。

親のなげきとなる女君。若菜冒頭以降このことは女三の宮の人物造型として一貫して形象化されたところである。

女三の宮のあまりに頼りない人柄のために、父朱雀院は限りない不安を抱かねばならず、弟君光源氏にあずけられた決断には、光源氏がかつて幼い茶上を引取つて育てたような理想的な愛育に深く期待する親心の哀れがあつた。院はわが子を知るがゆえに自らの期待

を危む気持を消去できなかった。出家後、院は源氏に対してばかりか紫上にも消息して宮のことを怒りに頼んでいられる。しかし、頼んでも頼んでも、院の、宮に対する不安は尽きなかった。「……たびたび聞こえたたまひける。されどあはれにうしろめたく、幼くおはするを思ひきこえたまひけり」(若菜上、五九頁。頁数は日本古典全書による。以下同じ)。源氏にあずけた後も、朱雀院は宮の幼稚さを身にしみて不安にお思い申されたのである。出家し、源氏にあずけ、というふうにするすべては処理されたかのごとくであつても、院の心は安らぐことがなかった。やんごとなき上皇の御身をもつて、紫上に宮のことを依頼なさる院の消息は、わが子の未成熟ゆえの卑下にも似た謙譲の御心が流露し真情にあふれている。院の紫上への消息は次のごとくである。「幼き人の、心地なきさまにて、うつろひものすらむを、罪なくおぼしゆるして後見たまへ。たづねたまふべきゆゑもやあらむとぞ。そむきにしこの世にのこる心こそ入るやまみちのほだしなりけれ 闇をえはるけで聞こゆるも、をこがましくや。」(若菜上、五九頁一六〇頁)――

「幼き人の」とお書きになつた院の御心はどのようであつたらう。宮の年令の幼さではない、心の幼稚さを言われているのだ。「心地なきさまにて」、親の命ずるまま何の自覚もなくぼんやりと、と、わが子を卑下してお書きにならねばならなかつた院の御心は、「そむきにしこの世にのこる心こそ入るやまみちのほだしなりけれ」の

御歌のように、また「闇をえはるけで」とお書きになつたように、まこと、子ゆゑの闇にさまよつていられるのであつた。

朱雀院が女三の宮を源氏に託したのは、世の常の結婚とはその期待、思わくを異にしていたと言ねばならないようである。親代わりとして庇護、愛育をたのむという気持が強いのである。さればこそ、対立的に考えられるべき紫上にもかような庇護的愛育の依頼がなされたのである。

朱雀院や「重々しき御乳母」の言葉は、女三の宮を独身で通させても結婚させてもいづれにしても不安だという思いでたゆたいたさまよつてゐる感があるが、その心情の基因をなすものは言うまでもなく女三の宮のいわけなき人柄であつた。

乳母の言葉に「御子達はひとりおはしますこそは例のことなれど」(若菜上、二四頁)というのがあり、皇女方は独身でいらつしやるのが普通である、というのにもかかわらず、「さまざまにつけて心よせたてまつり、何事につけても御後見したまふ人あるはたのもしげなり」(若菜上、二五頁)と言葉をつづけるのは単なる一般論ではなくて、皇女は独身が普通だが、(この宮のいわけなきを思えば)やはり後見(婿)がいることが望ましい、という、宮の幼稚な人柄を案じての思惟が示されていると見るべきであらう。「上を措きたてまつりて、……」以下、「自ら思の外のこともおはしまし、軽々しき間まごもあらむときには、いかさまにかはわづらはしからむ。」と

つづけていることで明らかであろう。

今井源衛氏の「平安朝初頭より一条朝以前までの皇女数と、その中の有配偶者数」に関する御調査^{註1}によれば、皇女の有配偶者の比率は一五%、無配偶者が八五%であることが明らかにされている。皇女独身が普通のことだという乳母の言葉を裏づける歴史的事実が示されたわけである。また、朱雀院の「御子達の世づきたる有様は、うたてあはあはしきやうにもあり、」という言葉の歴史的背景である。皇女独身主義が伝統的な皇族の矜持として朱雀院や乳母の心情の中にあつたようである。

しかし、同時に、今井氏の御調査では、醍醐朝において内親王の臣下（藤原氏）への降嫁は六人にまでのぼる事態があらわれていることが示され、律令制のゆるむところ内親王降嫁の例も出てきたことが明らかにされている。源氏物語においても大官（頭中將の母宮）、柏木への女二の宮の場合など、降嫁のことも自然に描かれているのは摂関制下の臭いが反映しているわけである。

だから、女三の宮の場合、独身でも結婚でもいずれの道をえらぶも自由な状況であつたと言い得べく、ただ、伝統的な古風な皇族の矜持を保とうとする觀念からは独身が好ましいとされたようであるし、大勢としては独身を通した皇女が多かつたということは今井氏の御調査でも、また乳母の「例のこと」という言葉からも、歴史的事実と物語の世界の双方において言い得る。

朱雀院や乳母が皇女独身を普通のこと、あるいは好ましいとしながら、女三の宮を結婚させようと考えるのは格別に頼りない宮の人柄を危んでのことであつた。宮が独身を通した場合、乳母は私たちだけでは宮にあやまちや軽々しい評判が生ずる不安がある。だから院の在世中に宮の結婚を定めてほしいというのである。院の思考も結局同様であつた。皇女独身が好ましいとしながらも、当世の「すぎずしく乱りがはしき事も、類にふれて聞こゆめりかし」という好色的状況にかんがみ、宮のいわけなき人柄から考えて独身ということには不安を覚えられたのである。

院の言葉が、最後には、女三の宮の「あやししくものはかなき心さまにやと、見ゆめる御様なるを……」（若菜上、二八頁）と宮の人柄に対する不安で終わるのは注意せられる。院も、乳母も、宮を結婚させることが安心だと信じているのでないことはその会話に明らかであつて、いずれにしても不安なままに思い迷いたどりついたというふうな思考であつた。

これらのことは、院の性格の弱さもさることながら、すべて女三の宮の人柄に由来するのである。東宮の「かの六条の院にこそ、親さまに譲りきこえさせたまはめ」（若菜上、三三頁）という言葉が源氏と心に決めながらも「よろづに思しわづら」（若菜上、三〇頁）う院にいよいよ最終的な決断を持たせたのも、東宮の「親さまに」という言葉が明確な指示を与えたのだと考えられる。それほどに女

三の宮の幼稚な人柄が院の心を支配していたのである。

かくて、「見はやしたてまつり、かつはまた片生ならむことをば、見かくし教へきこえつべからむ人の、うしろやすからむにあづけきこえばや」(若菜上、一三三頁)と言われ、また「六条の大臣の、式部卿の親王の女生ほし立てけむやうに、この宮をあづかりてはぐくまむ人もがな」(若菜上、一三三頁)と期待した後見の人は、源氏以外にはないということが結論されるにいたつたのである。

源氏に愛人が多いということを院も懸念するが、院は「かの六条の大臣は、げに、さりとる物の心えて、後安き方はよくなかりなむを、方々にあまたものせらるべき人々を、知るべきにもあらずかし」(若菜上、二九頁)と、すべて源氏の人柄の、万事を心得た豊かさによつたのだねられた。

院の判断は正しく、源氏はいわけなき宮の人柄に失望しながらも、院の期待通り「幼からむ御女のやうに、思ひはぐく」んだ。(若菜下、一三九頁)。源氏は女三の宮に琴を教え、琴の秘曲を会得させるまで「明教教へ」(若菜下、一四一頁)た。

源氏の円熟した深く豊かな人柄のゆえに、宮は、まことに院の期待通りに幸福な日々であつたといつてよい。かつまた、紫上の忍耐をはらんだよくできた人柄に助けられ、宮の幼稚さは、高貴な姫宮の底知れぬ素直さを湛えて安定を得ていた。

にもかかわらず、いまわしい、あの密通事件が起きたのであつた。

二 密通事件の責任

かつて、今井源衛氏はこの密通事件について、その最初の責任者として朱雀院をあげられ、婿えらびにおける錯誤、すなわち宮を六条院へ降嫁せしめた朱雀院の錯誤に密通事件の責任の所在を求められた。そして石田穰二氏による反論がなされたのであつた。

朱雀院が女三の宮を六条院に降嫁せしめたことが、この事件の原因であり失敗であつたということは、この事件の原因、責任が源氏や源氏の関係者、たとえば紫上などにあるというばあいには、言えることだと思われるが、密通の責任が六条院(源氏や紫上)にあるとは考えがたい。

源氏の愛情が紫上に向けられ、女三の宮が紫上に圧せられているという噂は柏木の情熱のよりどころとなり一種の正義感たらしめているが、懸念された源氏、紫上、女三の宮の關係は円満に保たれているのが実情であつた。紫上と女三の宮の對面は相互に好感の情があつたようであり、特に女三の宮は紫上に母性的ななつかしみを感じている。その對面の後は「常に御文かよひなどして、をかしき遊わざなどにつけても、うとからず聞こえかはしたまふ。……中略……かく憎げなくさへ聞こえかはしたまへば、事なほりて目安くなむありける」(若菜上、七三頁)とあるように、事あれかしとのぞむ世間の噂も立たなくなつたのであつた。やがては女三の宮に「渡りたまふこと、やうやう等しきやうになりゆく」(若菜下、

一三八頁)のであって、それは「内裏の帝さへ、御心よせに聞こえたまへば、おろかに聞かれたてまつらむいとはしくて」(若菜下、一三七頁)という義理に発するもののようにあるが、幼稚な女三の宮の人柄を理想的な人柄の紫上と比較すれば、むしろ宮に対する源氏の寵愛の深さを思わねばならないところである。「この宮をばいと心苦しく、幼からむ御女のやうに思ひはぐくみたまつりたまふ」ということほど、この宮にふさわしい愛情はない。かような源氏の愛情と紫上の忍耐(それはついに病を発するほどのものであった)をはらんだ好意とに包まれて、女三の宮は、その不安定な人柄の安住の地を六条院に得ていたと言わねばならない。

朱雀院が女三の宮を六条院に降嫁せしめたために密通事件が起きたというのは、結果論的裁断といわざるを得ないであろう。

この事件の主要原因が幼稚な女三の宮の人柄にあるという事件の経過から考えても、この宮を源氏以外の誰にあずけても、かような事件に類似した不始末をしでかす危険がないという保証はなかったのである。

宮の幼稚な人柄から考えて、あのばあい源氏は最善最高の親代わりであった。

朱雀院が、もし身分ということをおっしゃらず(朱雀院が身分ということを重ねられたことは顕著である)、愛情の眞実、を重ねてたとえば藤大納言や柏木やをえらんでいたらこのような事件

は起きなかったと考えることは、当代の、身分を抜きにはできない結婚観を無視するもので近代的にすぎるが、かりにゆずってそのような今日的な批判をしたとしても、この宮の病的な幼稚さを考慮するとき、かがであらう。

藤大納言や柏木らとて、結婚して宮の幼稚さに身近かに接したらひどく失望するであらう。柏木は、盲目的情熱にかられていた間はそれに気づきもしなかったが、密通の事が露顕した時、宮の幼稚さを非難している。

藤大納言や柏木に、源氏のような円熟は求め難いであらう。源氏のような女三の宮の愛育は求め難いであらう。とすれば、院の希望は最初から挫折したであらう。

藤大納言にしても柏木にしても、要するに朱雀院や乳母以外の人達は誰も宮の幼稚さを知らなかったのであるから、彼等の期望をもって直ちに眞の愛情と呼ぶこともできない。また、女三の宮にとつて必要だったのは、柏木のようなひたむきな情熱であるよりは、源氏のようなゆつたりとした寛い心、円熟であった。朱雀院は、父としての愛情を精魂かけて、最善の婿を宮のために求められたというべきで、院を責めることはできない。

そして、唯一つ懸念された源氏の女性たちとの関係も、前述したごとく紫上との間が円満に保たれて、院の、紫上にまで懇願された父性愛は、運命の神のよみしたまうところであったのである。

女三の宮に関係する人々はみな精一杯に愛情と善意と誠実をつくしたのであった。朱雀院も東宮も乳母も、そして源氏も紫上も。にもかかわらず事件が起きたのは、これらの人々の愛情も誠意も宮の人柄にまつわる黒い影のような不吉を消し去ることができなかったのだというよりほかない。運命的な悲劇だとこの事件を呼ばねばならないゆえんである。

この黒い影と不幸な心中をさせられるべく登場せしめられたのが柏木で、女三の宮の人柄に潜在していた、不始末の危険、という重油に火をつける役割を与えられたのが彼である。ために、彼は、若葉上巻終わり近くから、急遽、その役柄にふさわしい人物に仕立てられていくのである。(この、柏木の人物造型の方法については、別稿「源氏物語における人物造型の方法と主題との連関」において詳細に論ずる)。

女三の宮が不始末をしでかす可能性はその幼稚な人柄の中につとに胚胎せしめられ、潜伏せしめられていたのだといえる。朱雀院が、源氏や紫上の庇護の愛情に宮をゆだねつつも、この宮の幼稚さに対する不安に心の安まることになかった不吉な危惧が、ついに現実のこととなったのであった。

若葉上巻のはじめ、宮の幼稚さということは、宮を六条院へ割りこませるための造型であった。

源氏と紫上の理想的な一対を中核とする六条院の世界に、不自然

でなく新たに高貴な姫君を代入しめるにはどうすればよいか、作者の当面の問題だった。(その深い造型意図を胸中深くひそませつつも)。源氏に正妻がいないという着眼に立って、高貴な姫君が考えられたわけであるが、六条院に入らしめる必然性を丹念に作者は計算した。女三の宮の幼稚さは、たとえば、朝顔の姫君と紫上とが対立するような、六条院の愛の生活の中核がゆらいでしまうごとき危険を避けるための造型として、まずは、計算されたのであろう。

しかし、作者の真の奥深い造型意図は、宮の幼稚さにまつわる不吉な危惧にひそめられていたわけである。

この宮の幼稚さが父朱雀院の限らない心痛となったことは、既に見たごとくである。宮を迎えた源氏も、宮を迎えるやいなや、直ちに失望の苦澁を味わわねばならなかったのみならず、以後の、面倒で気苦労な後見に終始せしめられ、あげくの果には、密通のいまわしき裏切りまで受けねばならなかった。紫上は、その苦しい忍耐が内攻したと見らるべき病を発した。密通事件の暗影は、事件の当事者及び光源氏、朱雀院、柏木の家族等々関係者を、暗黒の不幸と絶望におとし入れていった。

この経過のうちにこそ、女三の宮の造型意図があること言うまでもない。

女三の宮の造型、登場は、藤裏葉において完結した明かるい紫上の世界の、内面的な暗さを、悲劇的な物語進行によって描こうとす

るためのものであった。源氏物語第二部の、榮華のかけにくりひらげられる内面の暗い世界を主導する人物として女三の宮が造型されたことは、これらの経過によって明らかである。

すなわち、そのような新しい主題を語るために、六条院の内面的世界に女三の宮を割りこませたのである。新しい主題のために新しい人物の造型がなされるのは、源氏物語における人物造型の方法である。(このことは、別稿「源氏物語における人物造型の方法と主題との連関」において述べる)。

女三の宮が傀儡であって、生きた人間の性格を有しない、すなわち無性格だといわれるのも、宮は不吉な影のようなものである点に意義があるのであって、宮の周辺の、宮に關係する人物にこそ生きた人生の図があるという理由によるであろう。

この宮のために、すべての人々が、愛と善意と誠実をつくしたにかかわらず、悲劇が生じたという人生の図こそ、いっさいが、偶然の積み重ねでなく、人間的行為の必然によるという、第二部の新しい特徴的な方法の生み出した深さであったのである。

傀儡女三の宮を操作する作者は、この人物をして、表面の榮華(II宮の身分の高さ)の内奥にひそむ暗さ(II宮の幼稚さ)という第二部の主題とシノニムな人物たらしめていることか。私は、第二部の世界を解く鍵は女三の宮の人物造型にあるという思いを長く持ちつづけており、本稿は、その解きたい謎を、いささかでも分析的に

考察しようとした断章である。

註1、2 「女三の宮の降嫁」(「文学」昭和三十年六月号)。

註3 「若菜の巻について」(「国語と国文学」昭和三十年十一月号)。

註4 「院の上だに、『かくあまたにかけかけしくて、人におされたまふやうにて、一人大殿ごもる夜な夜な多く、つれづれにて過ぐしたまふなり』など人の奏しけるついでにも、すこし悔い思したる御気色にて、……(古典全書、若菜下、一七〇頁)。

「『……かかる人のいとど世にながらへて、世のたのしびをつくさば、かたはらの人苦しからむ。今こそ二品の宮は、もとの御おほえあらはれたまはめ。いとほしげに^お庄されたりつる御おほえを』など、うちささめきけり。(若菜下、一八五頁)。

註5 拙稿「女三の宮事件の主題性について」柏木との事件に關する一考察」(「国語国文」昭和三十五年十一月号)参照。

註6 拙稿「源氏物語第二部の主題性について」女三の宮降嫁の事件」(「国文学攷」昭和三十五年五月号)参照。
「あはれにうしろめたく、幼くおはするを思ひきこえたまひけり」(若菜上、五九頁)。

(昭和三十九年八月稿)